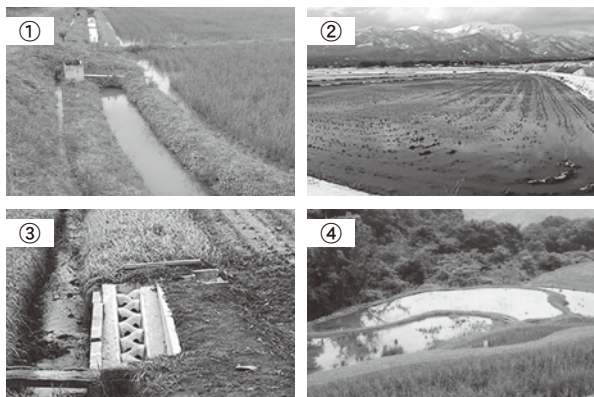


「世界重要農業資産システム」 (GIAHS・ジアス)

Globally Important Agricultural Heritage Systems

への登録を申請



生きものを育む農法

- ①江(深み)の設置
- ②ふゆみずたんぼ
- ③魚道など水路の設置
- ④ビオトープの設置

GIAHS(ジアス) とは?

国連農業食糧機構(FAO:本部ローマ)がグローバル化などの影響で衰退してきている伝統的農業や文化、地域景観の保全や持続的な活用の推進を図ることを目的に、平成14(2002)年に提唱した「世界重要農業資産システム」です。世界遺産と対比して「世界農業遺産」や「農業の世界遺産」とも呼ばれます。

GIAHSでは現在営まれている農業や土地利用だけでなく、生態系や地域景観、慣習、伝統など農業を営む上で関連する文化的要素を含めて資源として考えます。これらの資源のうち農業生産と生物多様性保全について総合的に評価し、次の世代への継承を目指すものです。

これまでチリのチロエ諸島でおよそ200種のイモを栽培する「チロエ農業」や、フィリピンのルソン島イフガオの棚田など8か所がGIAHSに登録されています。

佐渡市は、国際連合食糧農業機関(FAO)に対して「世界重要農業資産システム(GIAHS)」への登録を申請しました。

GIAHSの認定は、先進国ではあまり事例がなく、認定されれば日本国内では初めてのケースになります。

認定されると国内だけでなく、国際的な知名度も高まり、観光や農林水産物の販売促進など、多様な効果が期待されます。

※佐渡と同時に石川県の「能登の里山里海」も申請しました。

佐渡の米づくりは、弥生時代以降1700年の歴史を有し、江戸時代には金山が開発されたことにより人口が増大し、多くの農地が拓かれました。そして、鬼太鼓や能など多くの伝統芸能や多彩な文化が発展しました。

佐渡は、日本の野生トキの最終生息地であり、2008年からは人工繁殖によるトキの野生復帰の取組みが行われています。

トキの野生復帰にはエサ場となる水田の存在が不可欠です。現在、農家・地域住民が共同で水田の生物多様性を確保するための条件整備と「生きものを育む農法」による米づくりが進められ、その面積は年々拡大しています。こうした

水田で収穫された米は「朱鷺と暮らす郷米」として認証、付加価値の高い米として販売されています。

佐渡の「トキを育む生きものと共生する島づくり」は、生物多様性の保全と持続的な環境保全型農業の浸透、農家の所得向上という多面的な効果を生んでおり、世界的なモデルとなると考えられます。

地球環境の保全が叫ばれる中、佐渡市においても自然と調和し、トキをはじめとする地域の生物との共存を果していくことが未来の農業のスタンダードになっていくものと考えます。